

ISO 14001を活用して パリ協定/SDGs/ESG投資 に取り組む

連載 第7回(最終回): ISO 14001:2015を活用して
パリ協定/SDGs/ESG投資に取り組む

執筆/サステナビリティ・コンサルティング代表

猪刈 正利



最終回となる今回は、ISO 14001:2015規格を活用したパリ協定/SDGs/ESG投資への企業の対応について解説する。





1. ISO公式文書「UN Sustainable Development Goals - can ISO 14001 help? - Yes!」

本連載第1回で紹介したように、ISO (国際標準化機構)は、2016年11月、「UN Sustainable Development Goals - can ISO 14001 help? - Yes!」と題する文書をISOのホームページに掲載している。同文書では図表1-1及び図表1-2に示すように、SDGsの17の目標のうち、少なくとも12の目標はISO 14001:2015規格と関連性があるとしている。

2. SDGコンパスとISO 14001:2015規格の対比

SDGコンパスについては前回の連載で紹介したが、SDGコンパスとISO 14001:2015規格の対比表を次々頁図表2に示す。両者を俯瞰して見れば、どちらもPDCAサイクルで構成されており多くの類似点があるが、一方、次々頁図表3に

図表1-1 ISO 14001:2015規格と関連するSDGsの目標とターゲット(1/2)

SDGsの目標	ISO14001:2015規格と関連するSDGs各目標のターゲット
 <p>1 NO POVERTY</p>	1.5 2030年までに、貧困層や脆弱な状況にある人々の強靱性(レジリエンス)を構築し、気候変動に関連する極端な気象現象や、その他経済・社会・環境的ショックや災害に起因する暴露や脆弱性を軽減する。
 <p>2 ZERO HUNGER</p>	2.4 2030年までに、生産性を向上させ、生産量を増やし、生態系を維持し、気候変動や極端な気象現象、干ばつ、洪水及びその他の災害に対する適応能力を向上させ、漸進的に土地と土壌の質を改善させるような、持続可能な食料生産システムを確保し、強靱(レジリエント)な農業を実践する。
 <p>3 GOOD HEALTH AND WELL-BEING</p>	3.9 2030年までに、有害化学物質、ならびに大気、水質及び土壌の汚染による死亡及び疾病の件数を大幅に減少させる。
 <p>4 QUALITY EDUCATION</p>	4.7 2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

出典:<https://committee.iso.org/files/live/sites/tc207sc1/files/Final%20UN%20SDG%20and%20ISO%2014001%20071216.pdf>から作成
注: 下線部は原文で強調されていた箇所

図表1-2 ISO 14001:2015規格と関連するSDGsの目標とターゲット(2/2)

SDGsの目標	ISO14001:2015規格と関連するSDGs各目標のターゲット
 <p>6 CLEAN WATER AND SANITATION</p>	<p>6.3 2030年までに、<u>汚染の減少、投棄の廃絶と有害な化学物質の放出の最小化、未処理の排水の割合半減及び再生利用と安全な再利用を世界的規模で大幅に増加させることにより、水質を改善する。</u></p> <p>6.4 2030年までに、<u>全セクターにおいて水利用の効率を大幅に改善し、淡水の持続可能な採取及び供給を確保し水不足に対処するとともに、水不足に悩む人々の数を大幅に減少させる。</u></p> <p>6.5 2030年までに、<u>国境を越えた適切な協力を含む、あらゆるレベルでの統合水資源管理を実施する。</u></p> <p>6.6 2020年までに、<u>山地、森林、湿地、河川、帯水層、湖沼を含む水に関連する生態系の保護・回復を行う。</u></p>
 <p>7 AFFORDABLE AND CLEAN ENERGY</p>	<p>7.2 2030年までに、<u>世界のエネルギーミックスにおける再生可能エネルギーの割合を大幅に拡大させる。</u></p> <p>7.3 2030年までに、<u>世界全体のエネルギー効率の改善率を倍増させる。</u></p>
 <p>8 DECENT WORK AND ECONOMIC GROWTH</p>	<p>8.4 2030年までに、<u>世界の消費と生産における資源効率を漸進的に改善させ、先進国主導の下、持続可能な消費と生産に関する10年計画枠組みに従い、<u>経済成長と環境悪化の分断を図る。</u></u></p>
 <p>9 INDUSTRY, INNOVATION AND INFRASTRUCTURE</p>	<p>9.1 <u>すべての人々に安価で公平なアクセスに重点を置いた経済発展と人間の福祉を支援するために、<u>地域・越境インフラを含む質の高い、信頼でき、持続可能かつ強靱(レジリエント)なインフラを開発する。</u></u></p> <p>9.4 2030年までに、<u>資源利用効率の向上とクリーン技術及び環境に配慮した技術・産業プロセスの導入拡大を通じたインフラ改良や産業改善により、持続可能性を向上させる。すべての国々は各国の能力に応じた取組を行う。</u></p>
 <p>12 RESPONSIBLE CONSUMPTION AND PRODUCTION</p>	<p>12.2 2030年までに<u>天然資源の持続可能な管理及び効率的な利用を達成する。</u></p> <p>12.3 2030年までに<u>小売・消費レベルにおける世界全体の一人当たりの食料の廃棄を半減させ、収穫後損失などの生産・サプライチェーンにおける食品ロスを減少させる。</u></p> <p>12.4 2020年までに、<u>合意された国際的な枠組みに従い、<u>製品ライフサイクルを通じ、環境に適正な化学物質やすべての廃棄物の管理を実現し、人の健康や環境への悪影響を最小化するため、化学物質や廃棄物の大気、水、土壌への放出を大幅に削減する。</u></u></p> <p>12.5 2030年までに、<u>廃棄物の発生防止、削減、再生利用及び再利用により、廃棄物の発生を大幅に削減する。</u></p> <p>12.6 特に大企業や多国籍企業などの企業に対し、<u>持続可能な取り組みを導入し、持続可能性に関する情報を定期報告に盛り込むよう奨励する。</u></p>
 <p>13 CLIMATE ACTION</p>	<p>13.1 <u>すべての国々において、<u>気候関連災害や自然災害に対する強靱性(レジリエンス)及び適応の能力を強化する。</u></u></p>
 <p>14 LIFE BELOW WATER</p>	<p>14.1 2025年までに、<u>海洋堆積物や富栄養化を含む、特に陸上活動による汚染など、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、<u>大幅に削減する。</u></u></p> <p>14.3 <u>あらゆるレベルでの科学的協力の促進などを通じて、<u>海洋酸性化の影響を最小限化し、対処する。</u></u></p> <p>14.4 <u>水産資源を、実現可能な最短期間で少なくとも各資源の生物学的特性によって定められる最大持続生産量のレベルまで回復させるため、2020年までに、<u>漁獲を効果的に規制し、過剰漁業や違法・無報告・無規制漁業及び破壊的な漁業慣行を終了し、科学的な管理計画を実施する。</u></u></p>
 <p>15 LIFE ON LAND</p>	<p>15.1 2020年までに、<u>国際協定の下での義務に則って、森林、湿地、山地及び乾燥地をはじめとする<u>陸域生態系と内陸淡水生態系及びそれらのサービスの保全、回復及び持続可能な利用を確保する。</u></u></p> <p>15.2 2020年までに、<u>あらゆる種類の森林の持続可能な経営の実施を促進し、森林減少を阻止し、劣化した森林を回復し、世界全体で新規植林及び再植林を大幅に増加させる。</u></p> <p>15.3 2030年までに、<u>砂漠化に対処し、砂漠化、干ばつ及び洪水の影響を受けた土地などの劣化した土地と土壌を回復し、土地劣化に荷担しない世界の達成に尽力する。</u></p>

出典:<https://committee.iso.org/files/live/sites/tc207sc1/files/Final%20UN%20SDG%20and%20ISO%2014001%20071216.pdf>から作成
 注：下線部は原文で強調されていた箇所

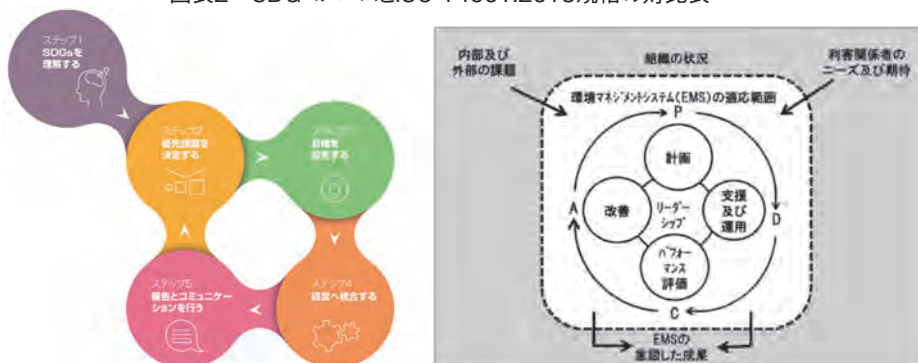
示すように両者の相違点もある。しかし図表3から、ISO 14001:2015規格に、SDGコンパスの「アウトサイド・イン・アプローチ（バックキャストイング）」の概念を付加すれば、ISO 14001:2015規格を運用することで、SDGコンパスの内容も実質カバーしていると言える。

3. ISOマネジメントシステム規格でSDGsを取り込む

ISOマネジメントシステム規格は整合化が図られ、その共通テキストの章構成は図表4に示すように統一化されている。つまり、「4.1 組織及びその状況の理解」、

「4.2 利害関係者のニーズ及び期待の理解」及び「6.1 リスク及び機会への取組み」は、環境のみならず、品質・食品安全・情報セキュリティ・事業継続・道路交通安全・労働安全衛生の全てのISOマネジメントシステム規格に共通する要求事項であるため、SDGs各目標・ターゲットに

図表2 SDGコンパスとISO 14001:2015規格の対比表



SDGコンパス		ISO 14001:2015
STEP1 SDGsを理解する	SDGsとは何か	
	企業がSDGsを利用する論理的根拠	
	企業の基本的責任	
STEP2 優先課題を決定する	バリューチェーンをマッピングし、影響領域を特定する	4.1 組織及びその状況の理解
	指標を選択し、データを収集する	4.2 利害関係者のニーズ及び期待の理解
	優先課題を決定する	4.3 環境マネジメントシステムの適用範囲の決定
STEP3 目標を設定する	目標範囲を設定し、KPI(主要業績評価指標)を選択する	6.1 リスク及び機会への取組み
	ベースラインを設定し、目標タイプを選択する	6.2 環境目標及びそれを達成するための計画策定
	意欲度を設定する(アウトサイド・イン・アプローチ)	9.1 監視、測定、分析及び評価
STEP4 経営へ統合する	SDGsへのコミットメントを公表する	5.2 方針
	持続可能な目標を企業に定着させる	7.4 コミュニケーション
	全ての部門に持続可能性を組み込む	5.1 リーダーシップ及びコミットメント
STEP5 報告とコミュニケーションを行う	パートナーシップに取り組む	5.3 組織の役割、責任及び権限
	効果的な報告とコミュニケーションを行う	6.2 環境目標及びそれを達成するための計画策定
	SDGs達成度についてコミュニケーションを行う	7.3 認識
		8.1 運用の計画及び管理
		7.4 コミュニケーション
		9.1 監視、測定、分析及び評価

図表3 SDGコンパスとISO 14001:2015規格の相違点

1. ISO 14001:2015規格は、例えば「戦略的な環境管理」の概念が盛り込まれているが、SDGコンパスが提唱する「アウトサイド・イン・アプローチ（バックキャストイング）」の概念は明記されていない。
2. 逆にSDGコンパスには明記されていない機能として、ISO 14001:2015規格の次の要求事項が挙げられる。つまりPDCAサイクルのC（パフォーマンス評価）とA（改善）の機能は、SDGコンパスよりISO 14001:2015規格の方が優れていると言える。
 - ① 9.1 監視、測定、分析及び評価（「9.1.2 順守評価」も含）
 - ② 9.2 内部監査
 - ③ 9.3 マネジメントレビュー
 - ④ 10.2 不適合及び是正処置

図表2及び図表3の出典:SDGコンパス (https://sdgcompass.org/wp-content/uploads/2016/04/SDG_Compass_Japanese.pdf)とISO 14001:2015規格からサステナビリティ・コンサルティングにて作成

関連する(環境以外の)社会課題をISO 14001:2015規格から取り込むことも、規格の構造上から十分に可能である。

4. 結語:ISO 14001:2015規格を活用してパリ協定/SDGs/ESG投資に取り組む

以上まとめると図表5に述べる理由か

ら、『ISO 14001:2015規格を活用してパリ協定/SDGs/ESG投資に取り組むことが合理的かつ効果的』である。図表6には、ISO 14001:2015規格の仕組みを活用して運用可能な社会課題の例を挙げておいたので参考にしていただきたい。

本連載ではこれまで7回にわたり、パリ協定、SDGs、ESG投資とISO 14001:2015規格他を活用した企業の

対応について解説してきた。パリ協定、SDGs、ESG投資への取組みは、企業の経営戦略に係わる重要なものである。その経営戦略を、全社一丸となって実践し推進していくためのツールとして、既に多くの企業で運営されており、かつ一定の知名度のあるISO 14001:2015規格をより有効活用していくことが期待される。(了)

図表4 ISOマネジメントシステム規格共通テキストの章構成

1. 適用範囲	7. 支援
2. 引用規格	7.1 資源
3. 用語及び定義	7.2 力量
4. 組織の状況	7.3 認識
4.1 組織及びその状況の理解	7.4 コミュニケーション
4.2 利害関係者のニーズ及び期待の理解	7.5 文書化した情報
4.3 ×××マネジメントシステムの範囲の決定	7.5.1 一般
4.4 ×××マネジメントシステム	7.5.2 作成及び更新
5. リーダーシップ	7.5.3 文書化した情報の管理
5.1 リーダーシップ及びコミットメント	8. 適用
5.2 方針	8.1 運用の計画及び管理
5.3 組織の役割、責任及び権限	9. パフォーマンス評価
6. 計画	9.1 監視、測定、分析及び評価
6.1 リスク及び機会への取組み	9.2 内部監査
6.2 ×××目的及びそれを達成するための計画策定	9.3 マネジメントレビュー
* ×××には環境、品質などの対象となるマネジメントシステム分野の名称が記述される	10. 改善
	10.1 不適合及び是正処置
	10.2 継続的改善

出典:https://webdesk.jsa.or.jp/pdf/dev/md_4617.pdfからサステナビリティ・コンサルティングにて作成



サステナビリティ・コンサルティング 代表
猪刈 正利 (いかり まさとし)

三菱マテリアル、MS&ADインターリスク総研を経て2018年4月から現職。成蹊大学非常勤講師、CEAR登録環境主任審査員(No.A20004)、環境省主催 環境コミュニケーション大賞ワーキンググループ委員。著書:「化学企業のISO14001」化学工業日報社共著、「進化する金融機関の環境リスク戦略」金融財政事情研究会共著、「企業の環境部門担当者のためのSDGs(持続可能な開発目標)をめぐる潮流がサクッとわかる本-パリ協定、SDGs、ESG投資とその後-」日刊工業共著、ほか著書多数

図表5 ISO 14001:2015規格を活用してパリ協定/SDGs/ESG投資に取り組むことが合理的かつ効果的な理由

- ① 環境省:SDGsガイド、GRI/UNGC/WBCSD:SDGコンパス、及びISO 14001:2015規格は、どれもPDCAサイクルが基本構造となっていること。
- ② SDGsの17の目標のうち少なくとも12の目標は、ISO 14001:2015規格と関連性があること。
- ③ ISO 14001:2015規格に「アウトサイド・イン・アプローチ(バックキャストिंग)」の概念を付加すれば、SDGコンパスの内容も実質カバーできること。
- ④ マネジメントシステム規格の統合化により、図表6に示すようなSDGs各目標・ターゲットに関連する(環境以外の)社会課題も、ISO 14001:2015規格の「4.1 組織及びその状況の理解」「4.2 利害関係者のニーズ及び期待の理解」及び「6.1 リスク及び機会への取組み」から取り込むことが可能なこと。

出典:各種資料からサステナビリティ・コンサルティングにて作成

図表6 ISO 14001:2015規格の仕組みを活用して運用可能な社会課題(例)

- 環境・社会課題の解決に貢献する製品・サービスの拡販
- 環境・社会課題の解決に貢献する製品・サービスの開発
- 社員満足度の向上
- 女性管理者比率の向上
- 社員の年次有給休暇取得率の向上
- 社員の残業時間の削減
- 社員の育児休業取得率の向上
- 社員の健康診断受診率の向上
- 社員の安全衛生管理指標の向上
- 社員の情報セキュリティ管理指標の向上
- 品質管理指標の向上
- お客様アンケートの満足度の向上
- 事業継続(BCM)や安全防災に関する取組み
- バリューチェーンにおけるサプライヤーへの取組み(例:人権、労働安全衛生)

出典:各種資料からサステナビリティ・コンサルティングにて作成